

旭川病院ニュース

題字は吉岡元病院長

【編集】

旭川医科大学医学部附属

病院広報誌編集委員会

委員長

八竹教授 (泌尿器科)

退官にあたって

思い出はそれぞれ別の箱に

放射線科長 天羽 一夫



昭和五十一年に旭川医科大学へ赴任された方々の大半は、昭和五十一年の附属病院開院の慌ただしさと感激は御記憶かと存じます。山田学長、黒田病院長をはじめとして、看護部長、事務局長が患者の来院を心配そうに御覧になり、どうやら一日を終えてホッとされたのは、はや遠い昔となり十六年は瞬く間でした。私の旭川への家族共々の

赴任の時、まだ小学生だった子供達が社会に出てもう数年になるのですから、自分ではアツという間でも、眼はかすみ、歯は手入れする時間が省け、頭は帽子を被らないと冷えて来るようになり、

否応なしに定年を迎えます。私は徳島から来ましたが、寒い所は初めてという訳ではなく、北緯六十四度に住んだ事も有りましたので、スキーにスケートにと結構楽しみました。しかし、還暦頃は体が動かなくなり、大雪山を歩いても息が切れる様になりました。きつとこの頃から血圧が怪しくなっていたでしょう。こうなりますと仕事も億劫にな

り、放射線科の皆様には教育、研究、臨床では随分負担を掛けました。教授は放射線部長を兼ねて居ます。技師、事務職の方々が大勢居られますが、新しい大学だけあって技師長以下気持の良い人達で、各診療科とも協調してくれましたので、病院のサービ

昭和五十年四月、附属病院創設準備のため赴任した。開設の一期校であり、先達のない全くの白紙の上に墨をつける事の喜びと希望に溢れていた。



旭川医科大学十八年

看職一人である。新設旭大病院の看護部のあり方。看護要員の算定、四百二十人要求。当時の臨床の教授、助教授、事務局と共に、病院開設PRポスターと看護職員募集案内第一号を持って、東北・北海道地区の看護学校、病院へと看護婦確保に走った。十月に看護部準備要員七人となる。日夜、日頃使い馴れない設計図と三角スケール、○の多い数字と文書と

のニラメッコであった。五十一年四月、看護職員百二十四人となる。目が輝いている若き看護婦全員の前立った時の責任と緊張感、今でも脳裏に焼きついている。大雪青年の家で一週間の総合オリエンテーションの後、北大病院、弘前大病院、札幌大及び旭川厚生病院へ研修に出発。七月、看宿完成。八月、院内研修、看護手順作成、開院準備、リハーサル等々。十一月一日、開院。玄関ロビーでテープカット。雪降る空へ色とりどりのフーセンが嬉しげに昇る。あれから十六年経過。道内で初のPOSによる診療記録、看護研修、研究会

ないことが多々あります。事故が起きる頻度も手術に次いで多い診療部門ですから、今の五人では充分ではありません。古い概念のレントゲン科ではなく、現在はインターベンショナル・ラジオロジーと呼ばれるものに成長しました。文部省、病院長にはどうか仕事に見合うだけの人手を付けて頂きたいと思っています。3Kとか給与がネックなら、何故、医療費を低く抑えて居るのか。日本医師会が交渉出来ないのなら、現在勤務医の数が開業医を上回るので、日本医師会

とは全く別の団体を勤務医が作る時代に来て居るので、時代と共に病院の機能、組織も変化して行かなければなりません。一人ひとりの思考も変化します。協調も争いもあるでしょうが、患者へのサービスだけは忘れて欲しくないものです。他医に紹介、返事する時はしっかりと書きましょう。このごろ、このあたりがすっかりルーズになっている様です。

医療の現場に居る人達は事務局に助けを貰わなければ、あまり嫌な顔をなさらずに、どうぞ宜しく御願ひ致します。最後に、御世話になりました皆様方に「有難う」の言葉を捧げると共に、皆様の御健康と旭川医科大学附属病院の益々の発展を祈ります。



発表、看護業務改善検討等の努力の積み重ねが今の看護部の姿である。

開設当初から道内は看護婦不足である。六十二年以降は駆け込み増床により特に深刻であった。平成三年四月～七月の ICU 閉鎖に至る経緯については、言語では言い尽くせぬ思いである。大学挙げての協力体制と他大学等の理解と協力を得て何とか乗り切れている事について、感謝の念でいっぱいである。

この苦しい間にも救いとなつたのは、看護職員の見護の質の向上への情熱である。病院情報総合システム開発に合わせて看護システムの構築へ向けて業務整理をしたこと。業務管理・勤務管理支援システムが二年に稼働している。残る看護過程のコンピュータ化については、プロジェクトチームを中心に全看護者で継続的に勉強している。この一月から看護の共通項目用紙を使ってプレテストに入っている。このひたむきな向上心が看護部を支えているのである。

いつも考えていることに、看護は患者のためにあること。人生は長い散歩道である。水溜りや穴を避けて歩くのも跳ぶのも、その人の人生である。遊び心が好きです。準備室以来、数えきれな

いま、気になる病気 話題の病気③

炎症性腸疾患

第三内科編

「炎症性腸疾患」とは感染性の腸炎をも含む広い概念を有する言葉ですが、臨床床上特に問題となるのは原因不明の慢性に経過する腸炎です。潰瘍性大腸炎やクローン病はこのような腸炎の大部分を占める疾患で、若年者に発症することが多く、しかも近年増加傾向にあることから、消化器病学の領域では注目を集めている分野のひとつとなっています。ここでは、これらの疾患の診断・治療における当科の取り組みについて紹介したいと思います。

【潰瘍性大腸炎】潰瘍性大腸炎は、おもに出血を伴う下痢を主症状とする疾患で、い程多くの方々にご指導を受けてお世話になりました。退官にあたって厚くお礼を申し上げます。



多くの症例では症状の強い活動期と炎症の落ち着く緩解期とを繰り返す経過をとりますが、自己免疫の要素が多いとされています。直腸から連続性に広がる炎症がこの疾患の特徴とされていますが、電子内視鏡を用いた拡大観察を行うと、正常粘膜を介して島状にスキップした病巣を有する例も見られることが我々の検討から明らかになりました。治療にはステロイドを必要とする場合が多く、長期にわたると副作用の発現が多いことから、その投与方法には工夫を要します。当科では症状の比較的強い症例（中等症以上）に対し、血中半減期の短いメチルプレドニゾロンを用いたパルス療法を施行して、プレドニソンの経口投与を節約し緩解導入したり、直腸あるいはS状結腸まで炎症を有する限局型の症例に対し、薬剤部に作成して頂いたステロイドゲルを用いた局所療法を行うなどの工夫を行い、良好な成績を得ています。【クローン病】クローン病

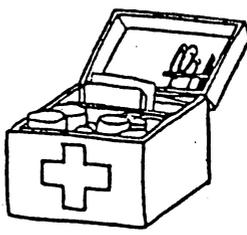
は、消化管のいろいろな部位に難治性の潰瘍性病変を生じる疾患で、その罹患部位により、栄養素の吸収障害による栄養不良や下痢を主体とする便通異常など様々な症状を呈してきます。この疾患においては、早期診断とその進展阻止が重要な課題となります。診断に際しては、大腸内視鏡検査と小腸造影が有用で、当科では大腸内視鏡に引き続いて小腸造影を一度に施行する逆行性小腸造影法なども行っています。この疾患の初期像は、非常に小さなリンパ濾胞の増性像やアフタと呼ばれる小さなびらんであることが多く、これらの部位からの生検が診断の決め手となる例が多くなってきました。この疾患の治療としては、経腸栄養療法がファーストチョイスとされており、薬物療法よりも潰瘍性病変の進展阻止効果が高いとされています。当科外来では、患者さんが自宅で栄養カテーターを経鼻自己挿管して行う在宅経腸栄養療法に取り組んでいます。また、痔瘻や腸管皮膚瘻などの瘻孔を有する症例では、血液凝固第十三因子が著明に低下していることを見出し、この補充療法を行うとともに病因との関連性を検討しています。

輸血部発 ② 「GVHD」という聞き慣れない病気

GVHDとは Graft-Versus Host Disease 「移植片対宿主病」と言い、移植（輸血も含まれる）に際してドナー由来のリンパ球が宿主の中で増殖し、宿主の骨髄、皮膚、肝臓などを攻撃する致死性の病気として知られている。診にあるが如く「軒先を貸して母屋を取られる」病である。

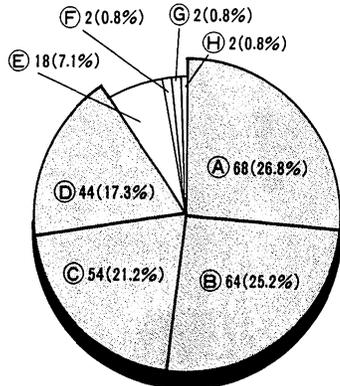
これらの疾患では、治療中に食事制限を必要とするため、栄養・生活指導が非常に重要な問題です。外来及び七階東ナースステーションでは、退院後もアンケート調査等に基づく指導や相談を積極的に施行しています。また、炎症性腸疾患の患者さんの親睦会である「腸寿会」も一昨年より発足し、医師・ナースや栄養科の栄養士さんも参加した講演会や小旅行などを通じて、食事療法などの情報交換を行っています。

今後我々のチームは、これらの疾患の病像を内視鏡を用いてよく観察して的確に診断し、よりよい治療を行うとともに、少しでも見えてきた病因解明の糸口を凝視していきたいと考えています。 (助手 蘆田 知史)



先日NHKで、二十歳の若い白血病の女性がアメリカから適合する骨髄をいただいて骨髄移植を行ったが、残念なことにとこの病気によって今年の一月中旬に亡くなった事がドキュメント風に報道されていた。骨髄移植では移植後の死因の四十分～五十%を占め、非常にポピュラーな合併症と認識されているが、輸血でこれが起る事は余り知られていない。輸血によるGVHDは、かつて術後紅皮症として認識されていた。手術中に輸血を受けた患者が術後一～二週間に発熱、下痢とともに

GVHD と判定された171症例の原因と考えられる輸血の種類



- (A)濃厚赤血球
- (B)新鮮血
- (C)院内新鮮血
- (D)保存血
- (E)濃厚血小板
- (F)洗浄赤血球
- (G)合成血
- (H)種類不明

●輸血した血液製剤との関係では新鮮血の関与が多くみられる一方、濃厚赤血球、保存血による発症も確認されました。また院内新鮮血は、とくに小児科における血縁者間の輸血による発症が多くみられます。

に皮膚の色が真っ赤になり、あれよあれよと言っている間に白血球、血小板の減少と肝機能の低下が現れ、三週間から一か月ほどで亡くなってしまうもので、初めは薬物か何かのアレルギイと考えられていた。最近になって、血液製剤のしかも新しい製剤(新鮮血、CRCDなど)に含まれる生きのいいリンパ球が、抗癌剤などで免疫不全状態になっている人(健康な人でも報告されている)に輸血されると、両者のHLAの組み合わせによってはこのリンパ球を外來のものとして認識できず、ちょうど骨髄移植を受けたように遺伝型の異なるリンパ球が増殖し、宿主を攻撃する事から発病するのが分かってきた。

GVHDの存在が認識されて、その発症頻度の調査が行われたところ、新鮮血が大量に使われる体外循環装置を用いる開心術約五〇〇例に一例で発症していた事が明らかになった。この頻度を低いと言われる方がおられるかもしれないが、この病気は現在のところ発病したら打つ手はなく死に至る事を考えると、決してないがしろにできないもので、新鮮な血液製剤を用いる際には十分な予防対策が必要である。

GVHDの予防法として、現在二つの方法が実際に用いられている。一つは放射線照射によって輸血する血液製剤中のリンパ球の増殖性を奪うもので、照射線量はおよそ十五Gy、リニアック照射装置で二〜三分で事足りる。もう一つは白血球除去フィルターを使う方法である。現在市販されているフィルターでは、製剤に混入する白血球数を一万分の一にまで減少させることができるが、赤血球製剤一単位中の白血球数が 1×10^9 個である事を考えると、 10^5 個の白血球(10個台のリンパ球)が残る事になり、発症頻度は下がるものの、絶対安全とは言えない。やはり放射線照射に分があると言える。

稀な疾患ゆえ気付かれないう事もあるようだが、HLAの近似性の高い我が国では常にその可能性を念頭に輸血を行う事が必要で、油断から貴重な命を失うことだけは避けたいものである。(副部長 山本 哲)



【薬剤部】

副作用情報(23)

向精神薬による眼障害

眼障害

向精神薬による眼症状は、一般に余り知られておりませんが、向精神薬はそれ本来の中枢神経作用のみならず、自律神経作用等を持っているため、種々の眼症状が報告されております。

フェノチアジン系薬物では、一九五八年頃からクロルプロマジンによる副作用が目ざされ、多数の報告がみられます。即ち、長期大量投与により眼球結膜への色素沈着、角膜、水晶体の変化や稀ではあるが色素沈着を伴った網膜症であり

ます。水晶体の変化は、まぶさ瞳孔領の水晶体前囊に褐色の微塵様色素沈着として現れ、次第に前囊下皮質の白色混濁に変わってきます。しかし、視力障害はほとんど来たさず、この変化が白内障にまで発展することは稀であります。また、網膜変化については、特にチオリダジンに著明にみられます。これらはフェノチアジン系薬物が、交感神経遮断と抗コリンの両方の作用を有していることを示唆しています。使用量からみると、クロルプロマジンは一日300

mg以上、総量500g以上(三年)で発症すると言われ、投与を中止しても余り改善されません。チオリダジンでは一日700mg以上を十五日〜三年、総量40g〜1045gで網膜色素変性を起こしている、などが報告されております。

次にブチロフェノン系薬物では、トリフルペリドールが厚生省医薬品副作用情報No.17(75・2)に記載されており、本剤を大量・長期にわたって投与された三例で白内障が起り、いずれも視力低下を来し、うち二例は水晶体全摘を行っています。その発現機序の一つとして、本剤の脱コレステロール作用及び肝障害により、二次的に水晶体の蛋白代謝を障害するため、白内障に進展するとの説が考えられております。

三環系抗うつ剤は、幾分の抗コリン作用を有しており、眼内圧上昇の可能性があるため、緑内障を誘発または悪化させることが考えられることから、緑内障には禁忌となっております。ベンゾジアゼピン系薬物の多くは急性狭隅角緑内障に禁忌とされており、本剤は一般に副交感神経抑制作用を有するため、虹彩括約筋や水晶体毛様筋を弛緩させ、散瞳や複視等の調節障害を起こすことがありと報告されております。



抗パーキンソン薬による視調節障害は、本剤が副交感神経抑制作用を有し、アセチルコリンの瞳孔括約筋と毛様体筋に対する作用に拮抗することによると報告されております。

以上、向精神薬による眼症状を述べましたが、薬剤による眼障害は、全身系の毒性発現よりも早期に鋭敏にみられることから、定期的な検査が重要と思われる。

なお、向精神薬の添付文書で使用上の注意の項における眼症状の記載をみると、①霧視、視調節障害等の自律神経作用により視覚障害を呈すると思われるもの、②角膜、水晶体等の異常色素沈着を起こすもの、③眼内圧亢進並びに緑内障を悪化させるもの、の三種に大別されており、注意が喚起されております。(薬品情報室長 藤田 育志)



シリーズ 南極四〇〇日

長谷川 裕

「雪上車トラブル」

平成三年十一月十八日十八時、内陸ドーム中継拠点を目指して、後期隊・四台の雪上車はみずほ基地を出発した。

走り出して二時間たったころうか、最後尾の雪上車がバックミラーから消えているのに気付く。はるかキコ後方にぼつんと見えていた。無線でエンジンの出力が弱く動かない連絡を受

け、目の前が真っ暗になる。(昨日まで動いていたものが、どうして・・・)

ここに一台残して輸送を続けても輸送量の激減になり、今後のオペレーションにも影響する。この場で修理しかない！(自分の車のエンジンだつて触ったことがないのに)。さっそくエンジン、燃料系統を点検、調整して何とか動くようになった。

翌日、問題の雪上車は二時間も走つてくれなかった。

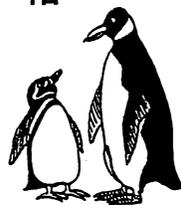
原因不明。食事時間も惜しんで作業を続ける。

朝三時、ようやく試運転にこぎつけたのだが、この日も半日持たなかった。エンジンの徹底分解、部品取替え作業は十二時間に及んだ。

今日も朝四時、もう大丈夫だろう。戻



▲アデリーペンギンのルツカール(集団営巣地)



4



つた、戻つた、調子が戻つた。電気屋の私にエンジンの修理が出来た。何でも屋・設営班の面目を何とか保つことができた出来事だつた。

「中継拠点到達」

みずほ基地を出て六日目、前期隊が立てた「ドーム中間拠点」と書かれた大きな看板だけしかない南緯七十四度、東経四十三度、標高三千三百mに着く。この看板の五百m後方に、まるでイースター島の人面像のように、整然と大量の燃料ドラム缶が並んでいた。

とうとう着いた！

思えば険しい道のりだった。雪上車トラブルに泣き、日課となった燃料タンクの水抜き作業と凍傷。1m以上あつたサスツルギという

雪の吹き溜まりの段差乗り越え、それを越えるのにはどんなに速くても時速五キロが限界だった。

一番悔やまれるのが、燃料ドラム缶のリーク(漏れ・穴あき)による燃料の流失だった。中間拠点を目前にして何度も現れたサスツルギ帯の乗り越えで、櫓に積んだドラム同士の衝突が原因だった。

それでも誰一人ケガする事なくここまで来れたことを喜ばなければ。(五人とも類にかすかな凍傷のシミが出来ているが。)

「大自然・極寒」

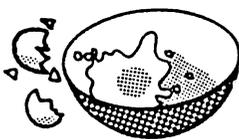
今、半径六百公里にはたつた五人、日本では考えられない人口密度だ。

到達した日、上昇気流が発生しないこの地で、一週間ぶりに雲を見た。「雲だ

左前方に！」久しぶりの雲発見に無線の会話が弾む。透き通つた青い空に雲が徐々に広がり地吹雪、そしてブリザードへと変わっていった。

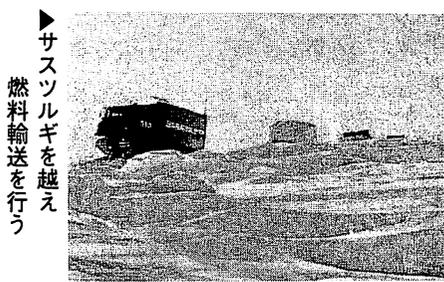
気温マイナス四十二度を観測(本当は六十℃ぐらいを体験したかったのだが)。だんだん寒さにマヒしてきたのだから、さほど寒く感じない。

この気温と空気が薄い中では火が付かないことが、五日に一度回つてくる食事



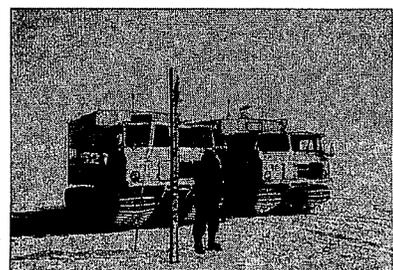
当番の一番の悩みだった。マッチが湿気ているのかと思いつつも束にするが、先の燐の部分だけ燃えとすとすぐ消える。そんな失敗を何度か繰り返し、肌着の内ポケットで温めた百円ライターの利用が効果的なことを学習する。今、ここではこれが一番貴重だ。

食事のメニューは、量は少なくてもとにかく温かいもの、とは言つても八十℃ぐらいで沸騰するためちよつとぬるめを感じる。朝食



▶サスツルギを越え燃料輸送を行う

▲南緯74°、東経43°に建てた指標



にフレンチトーストを考え、全卵パックが凍らないように抱いて寝たこともあったし、しばらく風呂に入つてないため髪と汗と靴下の異様な匂いがした。二重寝袋の中で温めた卵の料理を、みんなはうまい、うまいと言つて食べてくれた。日本の生活からみれば品不足、不自由な規制が多いのだが、この環境下で物のありがたみと「生きて帰る」執念を痛感した。

「無事帰還」

極低温・低酸素の中、燃料ドラム下ろし作業、車両点検を終え、三日間滞在した中間拠点を後にした。南緯七十四度、東経四十三度地点で、角材に三十二次隊到達と輸送メンバー全員の名前を書き込んだ指標(記念碑)を建ててきた。南極

の水床は年平均10mの速度で海に向かって移動しているが、この指標は六万年は大陸氷床にあることとなる。良い記念となった。

どこでも帰り道は早いものだ。みづほ基地で一日車両点検、機編成をして再び帰路に着く。

十二月九日、後期隊の全行程千三百キロ、三十日の旅は終わった。基地では全員が迎えにくれ握手責めだ。そして、風呂を思う存分楽しみ、文明の有難みをかみしめた。

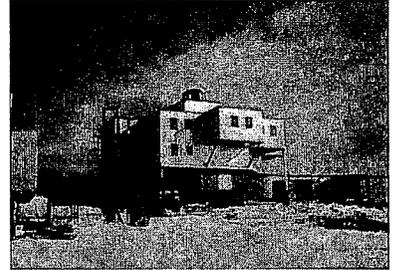
「夏作業と帰国準備」

基地に帰還してすぐ、夏になると基地周辺の島々に産卵に来るアデリーペンギンの調査に参加した。動物の姿を見るのは久しぶりだ。愛敬のある姿に、カメラのシャッターを何度も切った。十二月二十三日、次期三



待ちに待った「第一便」

完成した管理棟



十三次隊を乗せたしらせから、ヘリコプター「第一便」の空輸が行われた。待ちに待った家族からの便りや生鮮食料品が届いた。その晩、食卓には九月で底をついたキャベツの千切りが山のように積まれ、十ヶ月ぶりの西瓜が振る舞われた。久々に大きな笑い声が聞かれた夕食時間だった。

次期隊が上陸して来て、管理棟の建設仕上げを行っているのを横目に、我々は帰国準備をしなければならぬ。持ち帰るデータ・物品の整理・梱包で大忙しだ。機械隊員の引継ぎ、打合せに自然と力が入った。越冬開始早々の冷凍機事故を振り返ると、彼らには不自由させたくない。

「夢大陸」

二月一日、越冬交代日。昭和基地の管理は、全て三

十三次隊に渡った。

ヘリポートから飛び立ったヘリコプターは、我々の気持ちを酌んで何度も基地上空を旋回してくれた。(やっと終わった...)。涙で基地がよく見えない。しかし、何かやり残してきただような気がしてならない、今でも。

南極は、まだ未知であり未開発の地である。人間は、そんな所があるとすぐさま開発を考えてしまう。神秘

職員レクリエーションの団体の紹介

茶の湯同好会

私達の会は同好会といえます。一般に茶の湯というとか、堅苦しいとか、お行儀よくとか、そういう昔からのイメージがあって、今流行のお嬢様とか、着物を品良く着こなした奥様のお稽古ごとという感じがすると思えますが、そういうことは全くありません。ただ好きな者同志が集まって雰囲気を楽しんでいるという会です。

月に一度(第一金曜日)のお稽古の日には、交替で

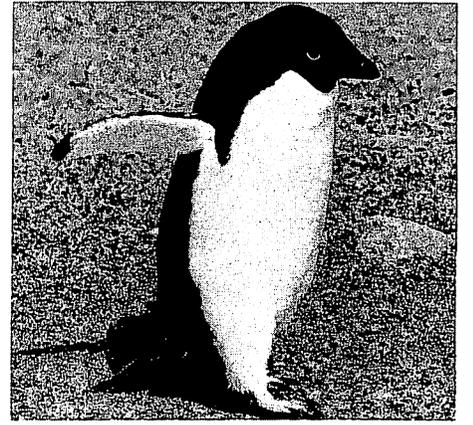
のベール(オーロラ)に隠された地域がこの地球上にひとつくらいあってもいい。人間を近づけたくない。自然は、きつと、このとてつもない寒さと低気圧が吹き荒れる海域で、人間を拒んでいるのかも知れない。夢大陸・南極の自然の大きさ、偉大さを感じる。

(おわりに)拙ない言葉足らずの南極越冬記となってしまうました。読んでいただいで少し

でも奥が深いのです。ですから、同じお点前を何度やっても、これくらいのことがないのです。ただ手順を覚えれば良いというところは全くないのです。その証拠に、同じお点前を順番通り間違いないくしても、初心者やベテランでは本当に違いがはつきりしてしまいます。また、同じくらいの年数の人でも、その人の人柄というか、日頃の立ち居振舞いというのが如実に現

れてくるものです。一つの所作が流れるように何のひっかかりもなくできれば、それはとても美しいも

でも南極に興味を持ち夢を抱いていただければ幸いです。最後に、南極観測隊参加という貴重な機会をくださった多くの関係者の方々に、この紙面をお借りしてお礼を申し上げます。



居振舞いというものが如実に現

れてくるものです。一つの所作が流れるように何のひっかかりもなくできれば、それはとても美しいも

